

シャルル・モーラスの政治と知性

松尾正路

要目

- 一 モーラスと祖國
- 二 ロマン主義の知性とデモクラシイ
- 三 地方主義
- 四 王の世襲

一 モーラスと祖國

ドレフェス事件以來、第一次大戦を経て、今日敗戦の悲運に直面するまで、近代デモクラシイ文化擁護者たりしフランスの社會に於て、シャルル・モーラスの存在は、一種の戲畫的存在であつた。フランスの國家的民族的運命の進行は、最後まで、モーラスの警告と豫言に忠實であつたが、フランスの社會意識と行爲の一切

は、モトラスの政治的眞實から離れて行つたのである。モトラスが説き來つた王道論の實證主義的知性なるものは、おそらく、フランスの知識人にとつては、モトラス自身の耳のやうに、聾の「知性」として映つてゐたであらう。

このことは、八九年の革命以來、傳統主義を基調とした政治理論や愛國の原理、また、宗教や文學の代表者達に共通した場合として考へられる。然しボナールやラムネーの傳統主義は本質的に形而上的乃至宗教的世界の問題であり、バレスの愛國文學や今日の少數の優れたカトリック作家の業績についても、人々は單に彼らの屬する政治的範疇によつてのみ語らうとはしないであらう。何人も、バルザックの文學的價値が彼の反動的政治信念によつて支配されるとは考へない。また、ゴビノオの貴族主義や反デモクラシーに關する人種論的結論が如何にフランスの社會から默殺されようとも、それは却て彼の宿命觀に相應はしい。

然るにモトラスの不幸は、彼が政治の論容たるに止まらず、王政樹立の直接行動者として生涯を賭し、その實現なくしては彼の思想と行動のすべての存在理由が失はれる點にあつた。「何を爲すべきか。王政を樹つべし。如何にして之を樹つべきか。力によつて。その力は奈邊より來るか。團結より來る。吾人を團結せしむるものは何ぞ。政治的眞實なり。政治的眞實とは何ぞ。王政なり。」¹⁾

彼自ら最高の師と仰ぐオーギュスト・コントの場合よりも更に深くカトリシズムの秩序への貢獻を信じたモトラスは、フランスの道徳もしくは風習、即ち祖國の内的秩序の必須條件として之を説き、カトリシズムを王

道論の支柱として出發したのであるが、ヴァチカンからは宗教の敵として排斥されるに至つた。その理由は、彼自身と彼の思想體系が無神論的であることの他に、反カトリック的陣營の判断によれば、アクション・フランセーズに對するヴァチカンの處置は、モーラスの味方であることがヴァチカンの利益に反すること、即ち、フランスの社會に於てモーラス王政論が實現することは絶対に不可能であるといふ見透しの結果であるとされてゐる。然し、法王廳の政策に關するこのやうな政治的見解も、此處ではそれがモーラスの政治行動に對する一般的な社會批判の現はれとしてのみ興味に價する。

人民戦線政府によつて投獄された彼は、三七年、同志から熱烈な出獄の祝ひを受けたのであるが、彼の王道論の現實的保證者たる舊フランス王族の代表者からは絶縁されるといふ致命傷を受けた。

そして、日支事變より今次ヨーロッパ大戦に至る間、機關紙「アクション・フランセーズ」のあらゆる主張に反して、祖國の行動がとられたのである。東亞に於ける日本の力と使命を理解したこの機關紙が如何に佛領印度支那の援蔣行爲について痛烈な批判と詳細な報告を行つてゐたか、筆者は當時巴里の一隅でそれらの記録や地圖を剪取つてゐたのであるが、佛印政廳は遂に「アクション・フランセーズ」の講讀を禁止するに至つた。

フランスは開戦し、同時に惨敗した。モーラスの一切を拒否した祖國は、異なる民族的性格と組織を持つとはいへ、政治の基礎的理念と動向に於てはモーラスのすべてを受容れたところの獨裁者達によつて征服された

のである。然も、フランス敗戦の重要な直接原因の一つは、左翼的抗戦觀念の外にあつて、よく世界と戦争の現實を注視してゐたフランス軍隊の士官の多くが、モーラスの「アクション・フランセーズ」を愛讀しつゝ、今次の戦争を欲しなかつた爲めである、といはれてゐる。もし、このやうな報導が多少の眞實を傳へるものとするれば、民族の力の回復のために全生涯を闘つたモーラス自身が、敗戦のあらゆる慘禍の原因に參加してゐるのである。そしてそれが、フランス國民と彼に與へられぬ最大の贈物であつた。

民族と力に關するモーラスの原理は、その同じ原理によつて破壊された祖國によつて證明されたのである。一つの民族主義が他の民族主義の否定の上に立つとしても、祖國の犠牲に於てなされる民族主義は在り得ない。とすれば、モーラスの希望は、如何に明日に残されるであらうか。彼は、一九一一年、王道論の「王政は如何に樹立すべきか」の章で、次のやうに述べてゐる。

「一人、もしくは、よく統制された一群の人々の最も微々たる創意も、それが自然の一般的機制に反して行はれない時には、そこから如何に多様な作用と遠大な成果が生じ得るかを理解する者にとつては、絶望が全く不可能となる。」「絶望は、政治に於ては、眞に奇怪なものゝやうに思はれる。」「我々の世代が成し得なかつたことは、次の世代が成し遂げるであらう。一時の屈伏があらうとも、我々の著書や行動やその記憶が教へを残すだらう。絶望は、死すべき人間には許される。然し、民族は、個々の人間に對しては、不滅である。碎かれ裂かるゝとも、限りなく民族の再生は可能である。ファイヒテが『ドイツ民族に告ぐ』講演のなかで、ゲルマンの

血と精神の普遍的天質を宣言した時、ベルリンにはフランスの一人の總督が居たのである。フランスも亦かゝる敗北の中から起ち上るであらう。」

「今日、もしくは明日の爲に、あるひは一九五〇年の爲に、我々はフランスを、その秩序と傳統と進歩を、再建する。」

三〇年前、このやうに叫んだモーラスとしては、世に如何なる絶望の理由も存在し得ないであらう。然し、今日、おそらく壽七十を數へ、耳遠きこの老政客に對し、誰か巴里のフィヒテたることを期待し得よう。

モーラスの老軀、今、果して祖國の地上に在りや否や？

x

モーラスの代表的な著書は、一九〇〇年から一九〇九年に渡つて、フランス王黨派もしくは傳統主義者の王政に關する見解を集録し、モーラス自身の註釋と結語を與へた *Enquête sur la monarchie* である。オクターヴ版五〇〇頁に餘る著述であるが、その内容は殆ど諸家の公開的書簡または探訪談話の形式となつてゐる結果、モーラスの王道論に緻密な學術的論理の展開をたどることは不可能である。先づモーラス自身が學者ではない。彼は文人である。政治の論客であり、行動の人である。然し、彼の王道論は極めて單純にして不拔な論據を持ち、恰も一つの起重機のごく、この論據によつてフランス革命とその繼續者たる近代フランスの政治及び文化をかたづけるのである。切札は強力であるかも知れないが枚數は僅かである。彼の *“Avenir de l'intelli-*

gence", "L'Idée de décentralisation", "Amants de Venise" 等の著述も、すべて切札の同じ繰返しに過ぎない。

而も、フランスの自然と歴史が要求する唯一の政治體制として説かれる彼の王政論も、デモクラシイに對立する政治の原理として説かれる王政論も、モーラス自身の創案によるものではない。彼の王政論は、寧ろ、それが彼の孤獨の眞理に非ざることを實證する爲の "L'Enquête sur la monachie" であつた。

また、王政と秩序とカトリシズムの調和も、もしそこからモーラスが信ずるコント及び彼自身の實證主義を除くならば、おそらく中世の神學者にまで溯るものであらう。

然しながら、近代民主主義思想に對して呼ばれる傳統主義思想體系の建設者として最も有力な代表者、ド・ボナールの存在を、モーラスの王政論と別に考へることは困難であらう。モーラスは常にコントを語り、ボナールについては、「ボナールの深い眞實」と云ふに止まつてゐるが、それは、ボナールの宗教と形而上學が彼の氣に入らなかつたからであらう。

「王政とデモクラシイ、それは、自然と技術 (art) である。この兩者の對立が必然である理由は、その對立が自然だからである。」

ボナールの形而上的自然をコントもしくはモーラスの實證主義的自然に置き代へるだけで充分である。而もこの區別さへ、時には甚だ曖昧である。

「デモクラシーから王政への推移は、一つの進歩である。」これは革命ではなく、「病氣から健康への回復である。」

ボナールが云ふ病氣とは、モーラスの場合、彼が政治の破壊者して扱ふロマン主義に他ならない。

「デモクラシーは弱者の政府であり、政府の最も弱きものである。」それ故、「今日すべての政府は強きことを欲し、従つて嚴格たらざるを得ない。」

此處に、モーラスが攻撃して止まぬデモクラシーの中央集權と、彼の地方主義に於ける政治的根據が発見される。

「純粹なるデモクラシーに於ては、權力は至る所に存在し、何處にも存在しない。」

モーラスの革命原理（フランス）の否定も亦此處から出發してゐる。

附記 以上、ボナールの言葉は “Le Romantisme et la Souveraineté, enquête bibliographique sur la philosophie du pouvoir

pendant la Restauration et la monarchie de juillet (1915—1848)”, par Jacques Poisson からの引用による。

- (1) Enquête sur la monarchie, p. 513. 譯者 伊吹武夫。
- (2) Francesco Nitti, La démocratie.
- (3) L'Enquête sur la monarchie, p. 498—514.
- (4) 「讀賣」外國電信機關紙「アクシオン・フランセーズ」の存在を傳えてゐる。昭和十五年九月二十七日。

二　ロマン主義の知性とデモクラシー

無政府主義的個人と社會文化の無秩序を、民主主義の根原的な性格に歸するモーラスの古典的知性は、フランス革命に於けるロマン主義精神の攻撃から始まる。モーラスの場合、ロマン主義、即ち彼の呼ぶ「病的精神」の否定がフランス革命の否定となつてゐると云つても過言ではない。従つて彼の革命否定は、モンテスキューやヴォルテールよりも、先づルウソオの否定から出發してゐる。

彼の師オーギュスト・コントが、神學と形而上學と實證哲學の序列を創りつゝ、主權に關する革命主義論理と信仰の否定に向つた如く、モーラスも亦「今日フランスの哲學と政治に與へられた重要な問題は、ロマン主義的病根に遺存し、由來する全てを斷絶するに在り¹⁾。」と考へた。Les amants de Venise の卷頭に掲げたルウソオとコントの引用文は、ロマン主義のプロテスタント的個人主義的意識に對する彼の解釋を最も明瞭に語つてゐる。

「私が欲する行爲について、私は私自身に相談するだけで足りる。私が善しと感ずる全てのは善く、私が惡しと感ずる全てのは惡である。最上の決定者は良心である、良心はかつて誤りたることなく、人間の眞の案内者である。魂に於ける良心は、本能の肉體に於けるが如きものであり、良心に従ふ者は自然に従ふ……良心こそ、人間を神の如くする善惡の不動の審判者である。」

ルウソオの Profession de foi du Vicaire Savoyard の中のこの一節を、モーラスはコントの言葉を假りて批評する。

「愚な、無政府的な父親から生れたこの若き婦人は、人間の生活が全く組織的な秩序の必要を持たず、我々を導くためには、感情だけで足りると考へ、且つ語つてゐる。」²⁾

即ち、モーラスが此處に定義するロマン主義の知性なるものは、無政府的、解體的意慾に従ふデモクラシイ文化を、人種的な立場から女性文化と呼んだゴピノオの名稱がそのまま適用されるものである。然し、モーラスによれば、ロマン主義以前のフランス、様々な人種と郷土から生ずる固有の文化を共有し統合してゐた王政のフランスは、その強力な政治の中心を基礎とした共同體的組織によつて、男々しき文化の體現者であつた。

そしてこれを破壊した者がロマン主義だつたのである。ロマン主義は「完全絶對なる自我の解放」を要求しつゝ、持續と連帶の絆を離脱し、民衆から孤立する。カトリック・エピキユリヤンと呼ばれるシャトオ・ブリヤンは、王や傳統や彼の「キリスト教の精髓」にもかゝはらず、個我の官能と想像の病によつて、無政府的ロマン主義の先覺者となつてゐる。

「シャトオブリヤンは、孤獨な、そして徹慢の裡に不隨となつた人間と、その自由の倦怠を愛するに至らしめた點で、ルウソオに次ぐ者であり」「恥づべき異教徒」である、とモーラスは云ふ。⁴⁾モーラスにとつて、シャトオブリヤンはアナルシイのシノニムでしかなかつた。

然し、此處に重要なのは、ロマン主義の本質の他に、思考や感情の一般風俗となつたこの文學の政治的影響である。政治の原理に代る文學的原理の登場である。モーラスの立場から云へば、王政即ち政治の眞の知性を侵略したデモクラシイ文學の勝利である。社會革命の意識的な側面としての文化現象に留意するとき、人々は常にそこに革命の指導原理や原理の發案者についてのみ語るのであるが、フランス革命當時の爲政者達が極めて文學的であつたばかりでなく、文學者自ら、直接、政治の權力に與つてゐた事實の意味については無關心である。ヴォルテールや百科辭典學派、そしてルウソオの流行から始つた文學の支配は、彼等がそこに冠した「理性」の名にかゝはらず、「現實の物理的法則にも、思想の論理的法則にも一致しなかつた。」「彼等の理性は、現實が提出する諸問題や環境を混亂し變質した」上に、文學(Ecritic)の「虚妄の勝利」をもたらしたのである。しかも「王權が失墜したとき、それは、人々が考へる如く人民の主權に移つたのではなく、ブルボン王朝の後繼者となつた者は文學者だつたのである。」⁵⁾かくして、文學の獨裁はロマン主義的病根を深め、抽象の信仰と左傾のロゴマシイをつくり、やがて近代デモクラシイの金權主義に汚されつゝ、フランスの政治的頹廢を導く、とモーラスは考へる。「立法者ならびに主權者としてナポレオンを觀るとき、彼が一人のイデオログであることを認めざるを得ない。……ルウソオと余、と誇り語つてゐたナポレオン、この學士院の會員がフランス革命を、そして革命とともに、十八世紀文學が夢想してゐた全てのものを繼續し、それを法令や民法の箇條に移すのである。共和八年の憲法やコンコルダや官僚行政は絶えず舊制度末期の流行思想を反映してゐる。實

際家としての賞すべき一面の素質が、これら脆弱な空想に永續的な現實の外見を與へてゐるが、我々のすべての不幸は、正しく、この虚偽の外見に由來してゐる。⁶⁾「我がフランスの一時的安定の原因は、實にこれらの行政的虚構と、文學的虚構との極めて現實的な一致であり、他の如何なる原因も存在しなかつた。これら二つの虚構の一致から、即ち、その一つは公的、他の一つは私的の文學であるところの、この二つの文學から、一種の調和、もしくは、相對的な安定感が生れたのである。⁷⁾」

モーラスが説くロマン主義の虚構は、近代フランスの政治と文化が絶えざる動搖と分裂の上に一時的安定を保つてゐたところの知性の虚構に通ずるものであり、今日の民族的悲劇を生む道だつたのであり、そしてこの道は、ヴォルテール、モンテスキューに溯りつゝ英國のデモクラシーに達するもので、フランスの政治的眞實、フランスがフランスである所以のもの、即ちフランスの王政と傳統から發した道ではなかつたのである。モーラスにとつて、所謂フランスの知性や、ヒュマニズムとはこのやうなものであつた。フランスの民族精神に對する相言葉が、常に必ず「知性」(intelligence)であることは、フランス及びフランス人に關する萬人の常識となつてゐるものであるが、モーラスが呼ぶ知性とは、民族の歴史と性格を通じて表現されるところの知性である。彼の著書「知性の將來」(L'Avenir de l'intelligence)といふ不思議な表題が示してゐるものである。民衆から遊離したロマン主義の個人的知性と文學は、今日に於ては政治經濟の組織統制と集團主義を厭ふフランス人の性癖となつてゐるものであり、「彼等が組織を持つ時にさへ、彼等は組織に對し全く傾倒してゐるの

ではなく、眞底に於ては、知性の主權をより多く信じて續けてゐるのである。」とシイグフリード云つてゐる。また、自然的結合に對立するすべてデモクラシイの運動は非社會契約であると結論するアランが「デモクラシイ精神の最も明瞭な部分は、それが非社會的たることである」と云ふ場合、アランの眞理は特にフランスのデモクラシイに關する場合である。このやうに個人主義的な知性として理解されるデモクラシイに對し、ベルグソンは、明快にして萬人の所有を許すフランス語は、學問の專有化とカスト的傾向を排除するに役立つもので、明瞭なること即ちデモクラシイの精神であると云ひ、フランス的知性の普遍性を説いてゐる。然しながら、このやうな知性の合理的性格は同時に個體の有限性と限界を越えてゆく性格であつて、個人を普遍的な理念に環元したフランス革命の性格に通ずるものである。少くともそれが革命の知性的な面であつた。「判斷よりも知性に專念した」フランスの文化は、一面個人的文化を深めつゝ、他方國際主義文化の方向をたどり、文學に於てはアンドレ・ジイドの型に現れ、政治に於てはレオン・ブリユームの型となつてゐる。この二重性格の中に、民族とその現實に對する一切の判斷が忘却されたのである。

然も、デモクラシイに於ける批評精神は、權威と持續と建設に對する破壊作用として現れ、「政府は既にあらゆる個人活動を共通の目的に導き統合すべき社會の首腦として認められず、恰も社會の中心に布陣した敵者の如く見做され、社會はこれに對し、自ら征服獲得せしところの保證をもつて武装し、絶えざる猜疑と防禦の敵意の中に立向ひ、敵者が示す最初の攻撃徴候にも挑みかゝらうとしてゐるのである。」¹⁰⁾

以上は、その一部をオーギュスト・コント論の中にモーラスが引用してゐる「實證政治體系」の一節である¹¹⁾が、政府に對する自由主義の戰闘行爲は、支配者と被支配者との同質の平面關係に於て行ふものであり、支配者に對する被支配者の攻撃は、國家權力もしくは國家の機能それ自體に向けられるのであつて、被支配者が慾する眞の自由や資格を可能ならしめる基本の組織方法への反省については知らぬのである。

「彼等は單に一つの原始的な門の上に更に第二の門を重ねたに過ぎず、それは政治的反逆の宗教であり、すべて支配するところの支配者に向ふ既定の抗議であり、國權の最も正當な運用に對し國家を弱體化し低減し破壊する強固な決意であつた。」「アミエルは、生活と行動に先立つ敏活な批評力や假借なき不斷の干涉が、行爲と生活力を薄弱ならしめた一個の魂を認め、これを描寫した。自由主義と議會主義の病は、國家の肉體に及ぼしたアミエルの病である。議會は政府の些細な決心や傾向まで批判する。而して政府はこの批判の先行者との闘ひに時を消失し、遂には、これら無用の檢閲者達に對し、健康者がなし得るやうな斷呼たる意志の遂行を斷念するに至るのである。政府はその活力を反對者との對話に吸収され、反對者の攻撃に對して己れを維持する必要と、國家を支配し統治する己れの義務とを混同する。……國家は、かくて衰微解體し、支配の權力は逃亡する¹²⁾。」

これがフランス革命の知性の歴史であり、知性が政治を支配した一つの實證であつた。また更に、政治を支配した知性は、他の別の秩序に屬するところの、然し同じ無名の、非人格 (impersonnel) の

世界を持つ支配力、即ち金力によつて征服される。この國際主義的知性と金力の結合こそ、モータスの政治運動に掲げられ、後には諸々の民族主義國家が繼承した反ユダヤ主義の對象であつた。パリとベルリンとロンドンに、密かに奉仕することの金力の支配は絶對的であり、全ての責任から脱することによつて民族生活の破壊者となるのであるが、デモクラシイ國家に於てはそれが、進歩せる文化と富の象徴となつてゐるものである。然しながら、「血と金力とは鬭ふ」¹³⁾。この鬭争の眞の判定たり得る者こそ、眞の知性である。

既に産業化され資本化された今日の知性、ジャーナリズムの支配によつて權威を失墜した知性の判定をモータスは信じない。

- (1) Les amants de Venise, introduction, p. 9.
- (2) Auguste Comte, X^ee Lettre au Dr Audiffrend.
- (3) プリヤンヌチエール、「フランスマ文學史序説」、關根秀雄譯。
- (4) Ch. Mauras, Trois idées politiques, p. 9.
- (5) L'Avenir de l'intelligence, p. 30.
- (6) L'Avenir de l'intelligence, p. 34.
- (7) Ibid, p. 34.
- (8) André Siegfried, Tableau des partis en France, p. 37.
- (9) L'Avenir de l'intelligence, p. 46.

- (10) Auguste Comte, *Système de politique positive*, p. 52.
- (11) 全四卷から成る同じ書名の「實證政治體系」一八五一—一八五四とは別なもの、Tacque Poisson, *La Romanisme et la souveraineté* の引用による。
- (12) Ch. Maurice, "Les Monod," cité dans l'Enquête.
- (13) L'Abenir de l'intelligence, p. 13.

三 地方主義

選舉制度の上に立つ民主主義の政治は、權力把握の方法として必然的に中央集權の手段をとる。それは、政治に於ける眞の力ではなく、寧ろ、力を持たざる政治の政治的手段に過ぎないものである。従つて、金權、官僚、買収、無責任等に關する民主政治の諸惡の根源がそこから發生する。モーラスがデモクラシイと呼ぶ政治は惡政の別名に他にならない。即ちトマスの「更にもし惡政が民衆により行はるるならば之を民衆政治即ち庶民の霸權と呼ぶ¹⁾」ところの政治である。王政の惡政が專制^{チラニ}と呼ばれるのに等しい。而もモーラスが罵倒するデモクラシイは「庶民の霸權」でさへもないのである。

民主主義政治に於ける中央集權は、力なき者の武器であり、民主主義の最も正常な口實である自由破壊者としての武器である²⁾。何故なら、その中に自由や自治や變化や多様性を許容し得るものは、一つの眞に力ある政治のみである。そして、このやうな政治の力を可能ならしめるものは王政である。王政は、その周圍のあらゆる

る機械の運轉を許し乍ら、自らは不變の位置にある樞軸の如きものである故、王政のみが持續と安定の基礎の上に、自由と進歩の保護者たり得る。フランス革命の最大の過失は、この樞軸の破壊によつて社會變革の達成と民族の安定を試みたことであつた。即ち、フランス革命はかゝる樞軸喪失の代償として、フランスに於ける民主主義的中央集權の最初の扉を開いたのであるが、「革命は、必要な改革の遂行とは反對に、舊組織の最後の足跡（地方—province 組合—associations 等）をも抹殺し、中央權力の利益目的の爲に、他のあらゆる權限と自由を剝奪することによつて自らの責任を過重にしつゝ、その權力を強化せず、弱めたのである。革命の悼むべきこの贈物が、十九世紀の權力に課せられた不安定の原因であつた。すでに百年來、中央權力は、恰も筋肉の疲勞が遂にそれを放棄させる瞬間まで、一つの極めて重き物體を持ち上げ、それをさし延べた腕に支へてゐる力士の如きものであつた。事實、權力はしばしばその重荷を放棄した。一八七〇年まで、それは十五ヶ年或は十八ヶ年毎に起つたのであるが、第三共和國以來八ヶ月は或は九ヶ月毎に起つてある。それはもはや幾つかの革命ではなく、内閣の單なる翻筋斗に過ぎないものである。今日の制度に見るこの種の反覆が過去に於けるが如き重要性や悲劇性を持たない理由は、責任の負擔者が虚構的非人格的存在だからである。」かくて、民主政治は政治の本來的な缺陷と中央集權によつて無政府と專制を往復する。

されば、モーラスにとつてナポレオンは、彼の共和主義と獨裁的權力によつて最も忌はしき中央集權の樹立者となつてゐる。フランス民族の傳統的風習と社會生活の基礎を破壊したものはナポレオンの民法である。

「一、職業の組合組織が極度に禁止され、

二、宗教團體は周到なる國家警察の下に服し、一切がその管轄に屬するに至つた。

三、慈善事業は公共的奉仕機關となり、國家の使用人達によつて管理され施行されなければならなかつた。

四、科學も亦同様、翰林院と大學に對する干涉によつて國家への隸屬状態に置かれた。

五、一七八九年の行政區劃（デパルトマン）以來、地方（プロヴァンス）はそのまゝ廢棄された。

六、自治團體（コムニヌ）は、その大部分が、何等かの意味に於ても國家から區別される爲には餘りに微々たる存在たらざるを得なかつた。

七、家族は、單に子供を産み養育する爲に不可欠な期間中のみ生存を限られるといふ鐵則を授けられたのである。やうやくその成長をみるや否や、年若き市民達は直ちに兩親の所有財に對する法律上の權利を獲得するのである。かくの如く新しきフランスの家族の子供は、彼が一人息子である時には、丁年に達するとともに、その創造者たる兩親に抗戦すべきすべての武器を供給され、更に、もし彼が一人でない場合は、この怖るべき闘ひは倍加される。即ち、闘争は先づ子供達から兩親に對し、次に兄弟や姉妹の間に於ておこなはれるのである。かゝる道徳的混亂が財産分配を契機として複雑化したことは、財の分配に與つた一人がその動産と不動産の全てに對し、現金支拂の請求を可能ならしめたことであつた。一七九三年、フランスの全國民に對して惹起された支拂現象が爾來、世々代々一定の時期に、より瑣細ではあるが無數の性質を帯びた問題として、フ

ランスの全家族に繰返されることになつたのである。……かくて先代の世代は後續せる世代が繼承し完成すべき業務を遺さず、従つて、力の聯合と富の集積は絶間なく分裂崩壞の前提となり、國家に對しては如何なる疑念をも與へ得ざるが如き状態に置かれた。國家は、單獨に、國家自ら、一つの眞の權力を施行してゐたのである。⁴⁾

このやうにナポレオンの中央集權を攻撃するモーラスの王道論は、それが如何に持續と力の原理であらうとも、自由主義的王道論たるを逸れない。特に今日の全體主義的政治、例へば、全民族の政治への能動的參加による統一的積極的政治體制に比較するならば、傳統と自然的條件を第一義とするモーラスの地方主義や組合組織の獨立協同性を強調する傾向は、また、科學の獨立性を説く彼は、極めて消極的な、多分にギリシヤの自由と個人に養はれたフランス人である。

然し、モーラスの上記論説は、第一次歐洲大戰前、一九〇〇年一月一日の機關紙「アクション・フランセーズ」に書かれたものであり、彼の王道論は緊急逼迫した事態に處すべき政治目的としてよりも、民族の傳統と力の失はれたものに對し、之を回復せんとする意圖の下に書かれた。即ち、戦闘態形としての政治ではなく、戦闘に於ける勝利を可能ならしめる恒久的平和の道として、常の姿としての王道論であつた。従つて、時代の經過と世界情勢の變化につれ、彼の王道論がイタリヤの組合國家主義やナチスの民族政治に進展して行つたことは、この三者の間に如何なる直接的聯關があつたか否かは別としても、そこに共通の流れが貫いてゐること

は否定し難い。

モーラスの民族全體主義 (nationalisme intégral) と地方主義 (decentralisation) は甚だ矛盾した印象を與へるが、彼の地方主義は行政上の人爲的、中央集權的區劃に對し、歴史と自然に規定された人格體、もしくは個人としての地方自治を主張するのであつて、「人權宣言」に於ける萬人平等の理念に立つ個人主張とは對立する。寧ろ、かゝる革命的抽象的個人主張を破壊する爲の地方主義である。フランス民族の複雑した人種分配や地方文化のながい歴史が要求する事實の權利である。平等の原則に對する不平等の原則である。そして、この原則は王政の原則によつてのみ可能であると説く故、政治上の地方分權とは全く別なものである。またプルドンの無政府主義的聯合原理と異つてゐる所以である。

「プルドンの天才が如何に鋭く豊かであらうとも、かゝる組織的天才に比して遙かに豊富巧妙な或る者が存在した。そは、歴史の幾世紀かを通じて行はれ來つた「自然」である。プルドンは或る種の聯合組織を定義したが、かゝる聯合はおそらく且て存在したことなく、アメリカ合衆國に於てさへ決して存在しなかつた。また今後も存在しないであらう。然るに自然は無數の聯合のタイプを生み、それらの或るものは消滅し、或るものは存續し繁榮してゐる。聯合主義の定義はこれ等のタイプによつてなさるべきである。」⁵⁾

此處に云ふ「自然」とは、おそらくコント及モーラス自身の實證主義的意味に解された自然であらう。更にモーラスは聯合主義に關して次のやうに云つてゐる。

「聯合主義は本質的に自治の主張である。少くとも地方的もしくは人種的な自治であり、その要因となるものは人間の意志よりも多く經濟的歴史的利害と性質である。そしてこの種の自治は全く相反した哲學もしくは政治的原理の下に建てられることが可能である。」即ち、「人權宣言」の先驅者たるアメリカ合衆國や封建帝國としての且てのドイツ、また立憲王國として存在したオースタリーハンガリー、現在のソヴェイエツト聯邦さへも、聯合の原則を排除してはゐない。

然らば、モーラスの王政とは、自然が可能ならしめる無數の相反した聯合國家の一つに屬すべきフランスの王政に他ならないだらうか、少くとも彼の地方主義は王政下の聯合主義であると思はれる。彼の王政と聯合と地方とは、同質單一の概念ではなく、歴史と民族に制約された個體の發展段階が、政治的には統一的秩序關係に立つものとして考へられる。共和八年の憲法以來、フランスの政治は、かゝる個體の成育と強化に役立つ全ての自然的組織を解體し、弱體化する經歷に過ぎなかつた。虚構の眞理と野心の武器によつて個體の特性を殺しつゝ、自らを無政府的自殺行爲に導くのがフランスの歴史であつた。

ナポレオン法典に對するモーラスの攻撃目標もこゝに在つたのである。家族に於ける個人權の尊敬と解放を目的とするかの如き法律も、實質的には個人と家族の發展を阻止する意圖の下につくられたことは、この民法に關するナポレオン自身の見解を示すものとして、當時ナポリの王であつたジョゼフ・ボナパルトに宛てた次のやうな書簡がある。

「余は巴里に百家族なるものを持ちたいと思ふ。百家族は悉く我が帝位とともに打建てられ、これらの家族のみが重要性を持続する、何故なら百家族は介立遺贈に限られ、百家族に非ざる他のすべての家族は民法により分解されるからである。貴兄もナポリに民法を施行されよ、貴兄に従屬せざるすべての家族はたちまち崩壊し、貴兄が保存を願ふ家族のみが鞏固になるであらう。」

勿論、コード・シヴィルの全てがナポレオンのこのやうな意圖の下に制定されたとは考へられない。法律學者の説によれば、寧ろ舊制度と革命精神の中庸を得てゐる點がナポレオン民法の特色とされ、親權制度に於ても既に立法議會（一七九一年）を通過した革命期法が「成年者は親權に服することなし、親權は未成年者の身上にのみ及ぶ」と立言してゐるのに對し、コード・シヴィルは、婚姻については父母の許可權を認めてゐる。然し、それにもかゝはらず、上記ナポレオンの書簡が物語る立法者の個人的意圖の反映は養子制度、協議離婚制にも現れ、ナポレオン法典の基礎がフランス革命の精神を受繼いでゐることは歴史の事實によつて自ら明瞭である。爾來、フランスの親族法に於て親權はますます弱められ、婚姻要件については男子二十一歳以上は父母の同意を要せず、その通告さへ不必要とされるに至つてゐる。

要するに、國家と地方、國家權力と自治權、全體と部分の關係は、モーラスが「我等の土の共同と相違、我等の血の共同と相違」¹⁰⁾と云ふ時に盡きてゐる。

國家權力の發動は、土と血の共同の面に於て絶對的に行はれる政治行動である。それは、民族國家に於ける最高秩序の支配であり、従つて最高の民族道徳は服従に在りとされる。モータラスが軍隊の尊嚴を説き、言論の國家的指導をさへ主張する所以も亦こゝに在る。

「單なる利潤目的の企業に過ぎざるジヤナリズムや、これに影響支配される民衆の過失は、感情や事實としての臨機的な愛國主義によつて救はるべきものではない。」

「愛國の義務は、常に民衆の全てに對し、指導の手引 (manuel) として與へられる。感情や事實としてではなく、原理 (theorie) として課せられる。我々は、事實を語るやいなや、たゞ大いなる神祕に遭遇するだけである。生活の運命を擔ふ國家は、一つの適切な機關が、その隠れたる緊急事を敏速に感知し、必要に應じて行動し得るやうに組織されてゐなければならぬ。もしこの機關を奪ふならば、民族は亡びるだけである。」

フランスの政治的錯覺は、良き感情といふものはそれ自身保持され永續化され、常に國家の壓倒的苦惱を負擔し得ると信ずることである。良き感情、それは良き事アクシデント件である。それが感じられる時にしか價値を持たぬものである。従つて、機關と制度によらざる限り、全てを盡して保護し維持さるべき生氣ある泉も遇然の成果たるに過ぎないものである。それは單に詭へ向きの還境と機會から生れるものである。九世紀に於けるノルマン侵入も、十五世紀に於けるイギリス人の侵略も、もしそれがたゞフランスの民族的感情を刺激し、之を許すに止まつたならば、何等の成果をももたらさなかつたらう。これら二つの侵略が與へた業績は、最初はカペー

王朝の樹立を促し、次はこの王朝を成就せしめたことにあつたと思ふ。一八〇六年に於けるドイツの不幸は、そこに勃然たる氣力の感情を興へた。然しこの感情も、二つの強力な王家が、その一つはメッテルニッヒと、他はビスマルクとともに、之を利用しなかつたならば、何の役にも立たなかつたであらう。

我々は愛國の感情に不足してはゐない。我々に缺けてゐるものは、よく組織化された國家である。フランスの眞の國家は言論の監視者たり得たであらう。そこに適切な指導を興へたであらう。然るに、人民投票の國家資格者たるフランスは、寧ろ或る程度、ジャナリズムに支配され來たつたのである。……¹¹⁾」

附記 今次歐州大戰に於てドイツとの停戰協定成立後、プルトーニウの自治宣言とヴェイシイ、ベタン政府による共和憲法の修正が發表されたのである。

- (1) 上田辰之助「トマス・アクキナス」七六頁。
- (2) Enquête sur la monarchie: Chez le comte de Lur-Saluces, p. 72—73.
- (3) Ibid. p. 77.
- (4) L'Enquête, p. 30.
- (5) L'Idée de la décentralisation, p. 19.
- (6) L'Idie de décentralisation, p. 18.
- (7) 'A vant la paix romaine, il exista une Gaule plus ou moins fédérée;.....il y en une France fédérative florissante et dont les contumes et les institutions se prolongèrent en Bretagne, en Bourgogne, en Provence;.....' Ch. Namras. Enquête, p. 24.
- (8) シャルル・モーラスの政治と知性 (松尾)

- (9) 谷口知平「佛蘭西民法」
 (10) L'Idée de décentralisation, p. 24.
 (11) L'Avenir de l'intelligence, p. 79—78.

四 王の世襲

傳統とは、その中に於てのみ進歩と改革が可能である生命發展と持續の原理である。政治的には、民族國家の力と獨立と、そして權力の民族化 (nationalisation du pouvoir central) を可能ならしめるものである。即ち、革命精神の繼續者たるフランスが民族の犠牲に於て失つたところである。王政は當然世襲でなければならぬ。王政の世襲は、單に議會主義の否定たるに止まらぬものである。

モーラスが殆ど全面的に支持してゐるポール・ブルジェの王政論は次のやうである。

「王政の解決こそ近代科學の教へに適合する唯一のものである。事實、フランス革命を支へたすべての假説は、今日、經驗に基礎づけられたところの自然に關する哲學が最も眞實に近い政治の健康法則として我々に教へる諸條件と絶對的に反してゐることを注目すべきである。最も明瞭な二、三の例をあけるならば、先づ科學は、生の發展が持續 (continuité) によつて行はれるといふ不斷の眞理の一つを我々に與へてゐる。この法則をヴァロルが既に社會有機體と呼んでゐたものに適用するならば、それは正に政治に於ける數の法則 即ち權力

の起源を現在の最大多数に置き、従つて必然的に永續的な國家活動を禁ずるところの人民主權の法則に反してゐる。科學は更に何を教へるか？ 生の發展に關する他の一つの法則は、淘汰、即ち遺傳法則である。社會秩序に於ける平等の原則ほど之に反するものがあるだらうか？ また更に科學は何を教へるか？ 人類の性格をつくる最も強力な要因の一つは人種である。即ちド・ヴォギエ氏の優れた描寫を借用するならば、我々自身のうちに語り續ける屍、我が先祖達によつて蓄積されたエネルギーである。かゝる事實の法則に對し、最も空虚な、最も非現實的な抽象たる人間それ自體を支配の與件として置く『人間權利』の宣言ほど矛盾したものはないであらう……」¹⁾

そしてモーラス自身は次のやうに語る、

「少數者の改革的知性なしには何事にも不可能である。然し、少數者達の個人的進歩も風習 (Habits) の進歩を決定するには不充分である。恵まれたる少數者が如何に賢明であり、強力であらうとも、彼等は他日死すべき生存者である。彼等の行爲と例證とは民族の歴史に於ける一瞬時たるに過ぎぬ。彼等の聰明は、閉ぢられた夜を再び閉づる爲に半ば開くに過ぎぬ。我々の最も良きものは、無限に繼續すべき制度によつてのみ持續される。この制度によつてのみ、人間が永遠化する。即ち、人間の良き行爲は繼續し風習となつて鞏固な基礎をつくり、風習はまた生に目を開く新しき世代に於て絶えず更新されつゝ、一つの美しき運動は、かくて、繰返し普及し無限に再生してゆくのである。

我々が、もし、プロテスタント的個人主義から免れようと欲するならば、^{モラル}道徳の問題は社會の問題に置き代へられねばならぬ。即ち、制度なき風習なるものは存在しないのである。而して風習の問題は他の全く政治的性質の問題に環元さるべきであり、此處にこそ少数者の反省すべき最初の問題が存在してゐる。」

それは、王政による制度であり、世襲の王政である。

(1) L'Enquête, p. 132.

(2) L'Avenir de l'intelligence, p. 15—16.